

當地藤井順一商店で

1943 NOV 1 新に醬油醸造業開始

完全な設備で本格的に乗出す

藤井社長の宿望を實現



當市藤井順一商店では、日本よりの醬油輸入が杜絶するや、醬油は在布日本人は云ふまでもなく一般外人の必需食料品となつてゐる點に鑑み、一つには顧客日頃の引立に酬ゆるため又一つにはローカル産業への貢献のため、藤井社長の意を受けて本格的醬油醸造の計畫

を立て、研究と準備を進めてゐた所、最近になつて充分の確信を得てその醸造を開始したが右につき大島支配人は語る「醬油が布哇の人々の必需食料品である以上、飽くまで食料品としての本質を具備させるため材料の如きも米國産の優良小麦及び大豆を使用することになつてゐます、一方これが製造に當つては弊店古參社員たる濱田丈一氏を主任として、人的陣容も充實し従業員一同ハリ切つてゐま

す云々」なほ來布中の藤井社長は來る四日大洋丸便で歸朝の豫定だが、同社長としては布哇は第二の故郷であり、當地の事業は飽くまで繼續する牢固たる信念に燃えてをり、今回來布を機會に凍結令後の營業状態をつぶさに見たが、何れも順調に進んで居り、又宿望たる醬油の醸造もいよ／＼その緒についたのを見て、これもお大方顧客の賜物で安心して日本に歸られます」と満足を表明してゐた

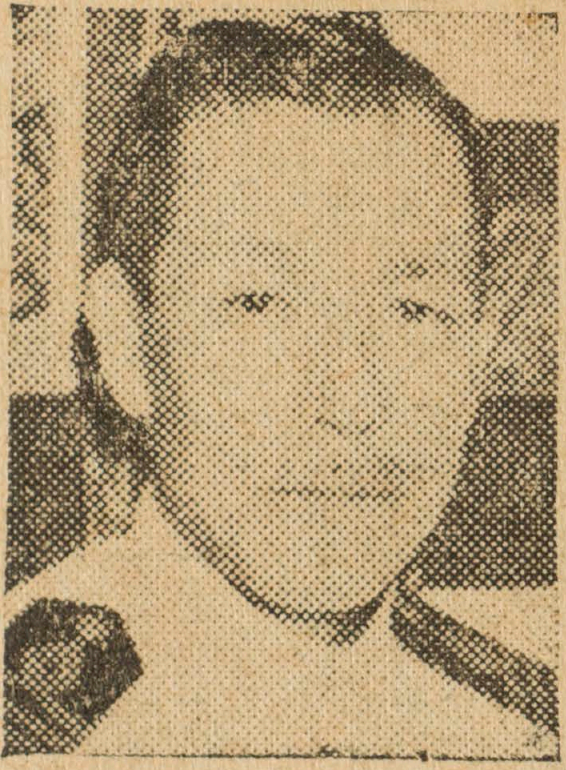
立往生中の滞日同船

大舉して喜びの歸

郵便物二百五十五袋の大

日本政府の布哇向け特別配船大洋丸は今日午前六時横濱より港外着、同八時半第八號棧橋へ入繋した、前回の配船龍田丸同様大洋丸煙突の郵船社標赤二引きは眞黒に塗り潰され、これが同船が日本政府によつて徵用されたためであつた、客は三百四十二名で全部ホノルル上りである、貨物は齎さなかつたが郵便物は二百五十五袋といふ大量を積んで來た、四日碇泊し來る四日午後五時約五百名内外の歸國者及び日本訪問者を積み横濱へ復航の途につく豫定である、絶望視されてゐた歸布が特別配船によつて可能となつたので大洋丸船客は何れも政府の措置に心から感謝してゐた

大洋丸さけ安着



〔原田船長談〕

大洋丸の

長は原田敬助氏で同氏は一九二四年カルカタ丸でホノルルに寄したことがあるだけで、米國方面は比較的縁の薄い人である、『私